

聖書：ルカ 20：41～44

説教題：ダビデの子、ダビデの主

日時：2012年11月4日

イエス様がエルサレムに入ってから、祭司長、律法学者、長老たちが次々にイエス様に論争を仕掛けました。この20章で私たちは3つのやり取りを見ました。一つ目は「何の権威によって、あなたはこのことをしているのか。」二つ目は「カイザルに税金を納めることは律法にかなっているか」三つ目は「7人の夫と結婚した女は、復活の際、誰の妻になるのか」いずれの問いに対しても、イエス様は見事な答えをされました。それで彼らは黙るしかなく、40節に「彼らはもうそれ以上、何も質問する勇気がなかった。」とあります。そんな状況で今度はイエス様から質問を出されたというのが今日の箇所です。イエス様はなぜこのことをされたのでしょうか。彼らに追い討ちをかけて、いよいよとつちめるためでしょうか。イエス様はエルサレムを見て激しく涙を流されたお方です。イエス様は人々が大切な真理を悟る者となるため、そして救いの恵みにあずかる者となるために、この問いを発されたのです。

そのイエス様の質問は、「どうして人々は、キリストをダビデの子と言うのですか。」というものでした。一見イエス様は、キリストが「ダビデの子」であることを否定しているようにも見えますが、キリストが「ダビデの子」であることは聖書がはっきり述べていることです。神はアダムとエバが罪を犯した直後、創世記3章15節で「最初の福音」を与えて下さいました。そしてその救いはアブラハムの子孫を通して、さらにはヤコブの12人の子どもたちの中のユダの子孫を通して実現されると示されて行きました。その約束はダビデ王において新しい発展を見ます。彼が周りのすべての敵を平定し、主のために家を建てたいと願った時、主はダビデにこう語られたと2サムエル記7章にあります。「あなたの日数が満ち、あなたがあなたの先祖たちとともに眠るとき、わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子を、あなたのあとに起こし、彼の王国を確立させる。・・・あなたの家とあなたの王国とは、わたしの前にとこしえまでも続き、あなたの王座はとこしえまでも堅く立つ。」しかし、その子ソロモンの時代に、イスラエルは南北に分裂してしまいます。その後にはいわゆる捕囚の憂き目にも遭います。そんな中でも、預言者たちは続けて、ダビデの子が現われて、その国を堅く立てる日が来ることを語り続けました。クリスマスの時によく読まれるイザヤ書9章の「ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。」とあるところにも、「その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に着いて、その王国を治め、云々」と記されています。またエゼキエル書37章の「わたしのしもべダビデが彼らの王となり、彼ら全体のただひとりの牧者となる。云々」とある御言葉もそうです。その他、エレミヤ書、アモス書、ミカ書にも同じよ

うな約束があります。そしてついにその約束はイエスにおいて実現したことを、このルカの福音書は語ってきました。マリヤに受胎告知をした天使は、その子に主は「父ダビデの王位をお与えになります。」と言いました。祭司ザカリヤも「主は、救いの角を、われらのために、しもべダビデの家に建てられた。」と言いました。3章の系図も、イエスがダビデの子であることを明記しています。また最近読んだところでは18章に出てきたエリコの盲人が、「ダビデの子のイエス様、わたしをあわれんでください。」と叫び、イエス様はそれを拒否されませんでした。ですからイエス様は、キリストは「ダビデの子ではない」と主張しようとしたものではありません。

イエス様はそのことを前提にしつつ、そこからさらに進んで、次のことを問われたのです。どうしてダビデの子であるキリストは、同時にダビデの主なのか、と。イエス様は詩篇110篇を引用します。42～43節：「ダビデ自身が詩篇の中でこう言っています。『主は私の主に言われた。「わたしが、あなたの敵をあなたの足台とする時まで、わたしの右の座に着いていなさい。』」 この42節には「主」という言葉が2回出てきますが、それぞれは別の存在を指しています。最初の「主」とは主なる神を指し、2回目に出て来る「わたしの主」とは、メシヤ・キリストを指します。そして注目すべきはここでダビデがキリストを「私の主」と呼んでいることです。普通、父親は自分の子どものことを「私の主」とは言いません。子が父を尊敬し、敬うのであって、その逆ではありません。古代世界ではなおさらそうです。ところがダビデは、ダビデの子を指して「私の主」と呼んだ。なぜ「ダビデの子」が同時に「ダビデの主」なのか。これはまさになぞなぞです。

果たしてイエス様が示そうとされたことは何でしょうか。イエス様はここで回答を出しておられませんので、簡単にそれを述べることはどうかとも思いますが、だからと言って、今日の説教をここで終わるわけにもいかないと思いますので、もう少し考えたいと思います。人々はイエス様をダビデの子としては見ていました。しかしイエス様をそれだけでは足りない、ということをおうとしておられる。ダビデ自身が、自分の後に来るダビデの子を「私の主」と呼んだことを良く考えに入れなければならない。ダビデがキリストを「私の主」と呼んだのは、キリストがより勝る存在だからです。その意味は人間以上の存在である、ということです。ただの人間なら、どんなに素晴らしい人間でも、「ダビデの子」以上にはなりません。しかしダビデがキリストを「私の主」と呼んだのは、この方が人間のレベルを越えるお方だから、すなわち神なるお方として仰いだからです。つまりイエス様はここでキリストは「まことの神」であり、かつ「まことの人」であるという、いわゆるキリスト二性一人格の神秘について語っておられたのです。

なぜイエス様はそのことをここで述べられたのでしょうか。それはイエス様とは誰なのか、その本質を私たちが正しく知り、一層この方により頼むためです。特に今日の御言葉が私たちに教えていることは、私たちはイエス様を単なる人間のレベルで見て終わりにしてはならないということです。キリストは人の性質を取ってこの世に来てくださいましたが、その本質は神ご自身であるということです。私たちは果たしてそのようにキリストを見つめているのでしょうか。もし私たちがそのように見るなら、聖書の色々なことはすっきり見えて来ることになります。世の中の多くの人々は、イエス様の処女降誕の話は受け入れられないとか、水の上を歩いたり、5千人の人に食べさせたりなどの奇跡はあり得ないと言って、色々人間的な仕方の説明しようとしませんが、もしキリストが本質的に神であられるお方なら、何の問題もなくなります。神にとって不可能なことは一つもありません。人にはできないことが神にはできます。この20章におけるエルサレムの指導者たちとの論争を見てもそうです。イエス様は彼らの悪意に満ちた質問にも、驚くべき知恵をもって答えておられます。そのため、指導者たちはもはや何も質問する勇気がなくなりました。これはイエス様が神であることを押さえて読むなら、より良く理解できることです。イエス様がこのようなダビデが主と呼んだ神であることを私たちがしっかりとらえるなら、私たちにはとてつもない慰めが与えられます。なぜならこのキリストのもとに来る時、私たちは単に一人の人間のところに来ているのではないからです。私たちはその時、全能の神に接しているのであり、天の力に生かされ、導いて頂くことができるのです。

しかしです。イエス様が本当に神なら、どうしてもっとそのことをはっきり現わさないのでしょうか。誰が見てもすぐにそれが分かる仕方でご自身を現わしたら、もっとみながイエス様を神と認めるのではないのでしょうか。しかし、イエス様がただご自身を神として示すだけでは私たちに救いはありません。私たちは罪人なので、神に接するだけではさばかれ、滅ぼされるのみです。私たちのような罪人の救いのためには、善を行なえない私たちに代わって完全な善を行ない、また私たちが犯した罪の精算のために代わりに罰を受けてくださる人が必要です。しかし普通の人間はみな、自分自身が罪を犯した存在であるため、他人を救える者にはなれません。そんなどうしようもない私たちの救いのために神が、私たちと同じ人間性をご自身の上にお取りになり、私たちの代わりに完全に正しい歩みをなし、また私たちが受けるべき罪の罰を背負おうとして、地上に来てくださった。そういうお方として、イエス様は神の光を輝かせて歩むよりは、むしろその光を肉の下に隠し、人間としての地道な歩みを続けて来てくださったのです。しかし、いよいよ十字架の死がそこまで迫って来たこの時、イエス様はご自身がどのような者であるかを証しされたのです。私たちはそのイエス様の御言葉の光のもとで、イエス様の生涯を振り返ってみなければならぬ。そうするならば、イエス様は何というへりくだりをもって、これまで歩いて来てくださったことか！

と私たちは改めて驚きと恐れを抱かずにいられません。人としての誕生においても、人間の両親のもとで忠実な歩みをするということにおいても、律法にかなう生活を日々送ることにおいても、・・・そこにおられたのは神だったのです！そして公の生涯に入っからは神の国を宣べ伝えつつ、人々からの様々な不当な仕打ちや反抗を受けました。その際、そこにおられたのは神ご自身であったのです！そしてこの方はなおこれからさらにひどい苦しみをその身に受けて行かれます。そこで私たちのために耐え忍ばれたのは、私たちの救いのために人となられた神ご自身だったのです！そのようなお方が、私たちのために尊いのちまでささげてくださいたら、確かに私たちにはとてつもなく素晴らしい救いが勝ち取られることになる、ということが分かって来ます。

そのわざを経てキリストは、どんな人をも自由に救い、祝福することのできる権威を持つ方として高く上げられます。イエス様はその時の祝福をここでも見つめています。43節の「わたしが、あなたの敵をあなたの足台とする時まで、わたしの右の座に着いていなさい。」という御言葉は、やがてイエス様が復活し、天に昇り、父なる神の右の座に着いてこそ実現します。弟子たちもこの時は、イエス様のなぞなぞに答えることはできませんでしたが、後にはこの真理を知る者へ導かれました。ペテロは使徒の働き2章のペンテコステの説教において、まさにイエス様がここで引用された詩篇110篇を引用して説教をしました。その時には使徒たちは、このキリストがダビデの子であり、またダビデの主であるということの意味が分かったのです。人として私たちのところに来られ、私たちの救いに必要なみわざをすべて成し遂げて下ったこの神にこそ、一切の望みと救いとがあることが分かったのです。

私たちはこのキリストを何と告白するのでしょうか。イエス様が神であるという事実は、私たちの魂にスリルを与えているのでしょうか。私たちのところに来られたのは神です。人となって私たちの世界でへりくだって歩んでくださったのは神です。その方が私たちのために大きな犠牲を払い、身代わりとなって十字架の死にまで進んでくださった。そこに何という救いが私たちのために勝ち取られていることでしょうか！そのキリストは、私たちの救い主として、今、父なる神の右の座ですべてを支配しています。このキリストを信じて、私たちはこの世にある時から、この方の全き恵みの支配の下に生きることができます。そしてこの方はやがて私たちを、完全な救い、完成された御国へ導き入れてくださいます。イエス様はこのご自身が神であり、人であることに慰めと救いを見出し、恵みの道を歩みようと人々に語り、招いてくださったのですし、今日の私たちをも、このご自身の内に救いと憩いを見出すように招いてくださっているのです。